

『麗気記』世界の生成——その構造を読み解く——

三橋 正

はじめに

『麗気記』は両部神道の代表的な書とされているが、中世前期に成立した他の神祇書と同様、その成立は明らかでない。書誌的には、尊経閣本（金沢文庫旧蔵）に劔阿（二二六一―二三三八）の種字があること、度会家行（二二五六―？）が元応二年（二二二〇）に撰録した『類聚神祇本源』に引用されていることなどが確実で、鎌倉時代末に成立・流布していたとは認められても、それ以上に遡っては考察できない。そこで、『麗気記』の内容を読み込むことよって、『麗気記』が形成されていく様相を復元してみたいと思う。

一、『麗気記』の構成と言説

『麗気記』諸本は、その構成（巻の順番）によりA・B・Cの三系統に分類できる。A系本は全十八巻について順番が定かでないもの、B系本は全十八巻の構成が「二所大神宮麗気記」の巻からはじまるもの、C系本は「天地麗気記」の巻からはじまるものである。C系本は版本に採用されるなど近世で一般的になり、『麗気記』全体が『天地麗気記』と呼ばれるようになるので、ある意味で『麗気記』の完成した姿といえる。しかし、良遍の『麗気聞書』など中世の註釈書はB系本の順番で書かれており、中世にはこの形

で定着していたと考えられる。また、唯一確実に鎌倉時代の写本と認められる尊経閣本がA系本であることから、『麗気記』の巻順は当初、確定していなかったとも考えられる。

『麗気記』は一般に、伊勢神宮を密教的に説明した両部神道の書であるとされている。確かに、内・外宮を曼陀羅の胎藏・金剛両界に対応させるといふ基本的なモチーフが全体を通じて存在しているように見受けられる。しかし、各巻の内容を比較検討すると、両部の大日如来が豊受皇大神宮の内部に並んで鎮座しているとあったり、イザナギ・イザナミが金剛・胎藏両界に振り分けられるなど、言説の不統一が認められる。これは、『麗気記』各巻の独自性が強く、個別に形成された複数の巻を集めた書であったことを示している。換言すれば、『麗気記』は最初から十八巻が一括して制作されたのではなく、別々に成立していた巻がある時期に集成され、それ故に巻順も定まっていなかったと想像される。

最近の研究では、「天札巻」と呼ばれる「三界表麗気記」が重視され、麗気灌頂などのような礼儀で『麗気記』が伝授される際に、この巻が中核となっていたことが指摘されている。けれども、『麗気記』成立当初からそのように扱われていたとは考え難い。

次に、『麗気記』の構造を探るために、B系本とC系本の巻順の違いを見てみたい。

〔B系本〕の構成（順序）

- ① 二所大神宮麗気記
- ② 神天上地下次第
- ③ 降臨次第麗気記
- ④ 天地麗気記
- ⑤ 天照皇大神宮鎮座次第
- ⑥ 豊受皇太神鎮座次第

〔C系本〕の構成（順序）

- ① 天地麗気記
- ② 二所大神宮麗気記
- ③ 天照皇大神宮鎮座次第
- ④ 豊受皇太神鎮座次第
- ⑤ 神天上地下次第
- ⑥ 降臨次第麗気記

- | | |
|-------------|-------------|
| ⑦ 心柱麗気記 | ⑦ 神梵語麗気記 |
| ⑧ 神梵語麗気記 | ⑧ 万鏡本縁神靈瑞器記 |
| ⑨ 万鏡本縁神靈瑞器記 | ⑨ 心柱麗気記 |
| ⑩ 神号麗気記 | ⑩ 神号麗気記 |
| ⑪ 神形注麗気記 | ⑪ 三界表麗気記 |
| ⑫ 三界表麗気記 | ⑫ 神形注麗気記 |
| ⑬ 現凶麗気記 | ⑬ 現凶麗気記 |
| ⑭ 仏法神道麗気記 | ⑭ 仏法神道麗気記 |
| ⑮ ~ ⑱ 神体図 | ⑮ ~ ⑱ 神体図 |

B系本とC系本の巻順は、⑬以降が同じであるだけで、

他はすべて異なっている。ところが、その順番の異同は、前半の巻六まで(①)~(⑥)と後半の巻七以降(⑦)~(⑫)の中でのことであり、両方をまたがる異同はない。これは、前半の諸巻と後半の諸巻は峻別されていたことを物語る。

前半六巻では、B系本での②と③(C系本での⑤と⑥)、B系本の⑤と⑥(C系本の③と④)がそれぞれ対になり、内宮と外宮を対比する形式を採っている。特に②「神天上地下次第」は、外題・尾題を③と同じ「降臨次第麗氣記」としている。そして、②が神代から垂仁天皇までの系譜の中に内宮に関する歴史記述を折り込んでいるのに対し、③は外宮の鎮座の歴史を述べる中に垂仁天皇から雄略天皇までの系譜を載せており、両巻は一对のものであったと理解される。外宮の鎮座については①「二所大神宮麗氣記」の巻末にも付記されているためであろうか、③「降臨次第麗氣記」の記述は簡潔であり、かつ異色である。ただ、内宮の鎮座を書いた②「神天上地下次第」は、神道五部書の『倭姫命世記』と近似しており、このような神統譜・皇統譜を基盤として言説を展開する形式は、伊勢神道に做ったと考えられる。仏教説についても、両巻は『撰真実経』の強い影響の基に書かれている。同様に⑤「天照皇大神宮鎮座次第」と⑥「豊受皇大神鎮座次第」が一对で、それぞれ内宮・外宮を曼荼羅の胎藏・金剛両界にあてはめ、同じ構造のもの

とでそれぞれに鎮座する相殿神や神体などを論じている。両巻の項目名のみを見れば、神道五部書の『天照坐伊勢二所皇大神宮御鎮座次第記』と近似している。

『麗氣記』前半には、序文的な意味を持つ①「二所大神宮麗氣記」(②)と、総説的な意味を持つ④「天地麗氣記」(①)とがあり、この六巻で一つの完結した世界を形作っていたのではないだろうか。これをB系本の順番で読むならば、最初に①「二所大神宮麗氣記」で種々の秘説が開示され、続く諸巻で伊勢の内両宮についての仏教的な説明がなされ、最後に再び総括される、という構造を持っていることになる。この前半の言説の形成基盤に、伊勢の神道書と共通する神統譜・皇統譜・鎮座次第などが活用されていたのである。

それに対し後半は、伊勢神道的な色彩が薄れ、仏教的色彩が一層濃厚である。心柱について書かれた⑦「心柱麗氣記」(⑨)や御神体の鏡に関する⑨「万鏡本縁神靈瑞器記」(⑧)でも、密教によって把握されている。⑧「神梵語麗氣記」(⑦)にある豊受皇大神・天照皇大神の説明も梵字の知識なしには理解できない。⑩「神号麗氣記」(⑩)での神の分類も全く仏教的である。また、⑪「神形注麗氣記」(⑫)、⑫「三界表麗氣記」(⑪)、⑬「現凶麗氣記」と、文章の量が少なく、凶像と一体性の強い巻が続くことも大き

な特色である。ここでも梵字が多く用いられているが、それは、密教で秘法を師から弟子へ伝授する際に渡される「印信」であったからではなからうか。先に⑫「三界表麗氣記」が「天札巻」として伝授の場で重視されていたことを指摘したが、⑬「現図麗氣記」には「天札以後可_レ伝_レ之」とあり、三種の神器についての秘伝や絵図を載せたこの巻全体が、「天札」後に伝授されたことを伝えている。

『麗氣記』の本文(言説)として最後に置かれる⑭「仏法神道麗氣記」では、冒頭に仏語で己の心の神祇を顕わすとし、法相・三論・天台の理論について述べ、惣持教(真言)の理論を明かした上で、内外両宮・日本大小神祇を曼陀羅の諸尊にたとえている。

二、『麗氣記』の成立と編者

『麗氣記』後半では内容が仏教的言説で統一されているだけでなく、項目の立て方も独自で、前半に見られた伊勢神道と共通する要素がなくなっている。これは、先ず伊勢神宮に関する言説を記した巻が集成されて前半を形成し、その後で、密教儀礼的な色彩を濃くした後半の巻が成立・付加されていたことを示しているのではないだろうか。

もしも『麗氣記』がこのような思想的営為の中で生まれ

たとするならば、それはかなり長い時間の中で複数の人物が関わり、幾度かの書き直しや追記が行なわれたことよって生成されたと思われる。

従来、『麗氣記』の作者(編者)について、伊勢の神官とする見解と、密教に精通した仏家(僧侶)とする見解とが出されていた。神官によるという説の根拠としては、伊勢についての深い知識があることと共に、①「二所大神宮麗氣記」の最後に「髮長行者ガ為ニ、上々々々コトハ耶々也。」とあり、これを僧侶には教えてはならない、と解釈できることが挙げられている。しかし、『麗氣記』には神官にとつて最も必要とされたであろう儀式・作法・禁忌(穢や服喪に関する規定)などについての記述が見られない。それに対し、随所に仏典が引用され、梵字が書かれるなど、全体が仏教の言説・思想で覆われている。そうすると、伊勢についての深い知識は『麗氣記』として成立する以前の段階にあったもので、そこに仏家が言説を加えていったと考える方が自然である。「髮長行者」の一文についても、秘説であることを強調し、妄りに広めることを諫める詞として捉えられる。

『麗氣記』は密教的な言説に支配され、密教的な儀礼によつて伝授されていた。よつて、真言(密教)に明るい人物がその成立に関与していたことは疑いない。ただ、伊勢

の神道書と密接な関係にある『麗気記』前半については、「二所大神宮麗気記」の最後に「内ヲ存するの人ハ、観想を蔵^{カタ}せ」とあることから、神祇に関心を持つ僧侶が、遠方から伊勢神宮を観想するためにこれらの諸巻を集め、また観想をしていく中で注記を加えていったことにより成立したと想像される。観想とは、一つの対象に心を集中させてイメージすることである。それが修行として定着し、密教儀礼化していく段階で、『麗気記』後半の諸巻が加えられ、整備されていったのではないだろうか。さらに作者（編者）を絞り込むとすれば、やはり①「二所大神宮麗気記」冒頭に役行者の説があり、随所に『葛城宝山記』が引用されていることから、葛城山、ないしはその流れを受けた修験の僧侶が想定される。⑩「神号麗気記」の「大日本国地霊神」という項目に「金剛山」「鳴武大明神」「熊野」しか挙げられていないことも傍証となるであろう。

おわりに

現段階で『麗気記』の作者（編者）は特定できない。けれども、修験の存在を想定することで、本書が各地へ伝播されていた理由もある程度説明が可能になる。

『麗気記』が伊勢を観想する僧侶の営みの中で「生成」

された書であったとするならば、それは明確な思想的営為のもとに個人が書いた所謂「思想書」と同列に扱うべきではない。時間をかけて変質していく言説をどう捉え、理解するか。これが今後の神道思想研究にとって一つの鍵になるであろう。